

怖い話はすぐ隣り

本当にあった怖い話
不思議で怪奇な体験談
公開中の20話掲載

あづま にしき

列車事故の後始末

わたしが住んでいる地方都市には一本のローカル線が走っていた。そのローカル線で数十年前、脱線事故が起きた。詳しい被害状況はよく覚えてないが、数名の方が亡くなったのは確かだ。当時、わたしの叔父は事故現場のすぐ近くで織物業を営んでいた。

事故が起こった時、あまりに大きな音にビックリして仕事場を飛び出すと、叔父の目の前には悲惨な状況が広がっていたと言う。

横倒しになった車体と、散乱するガラスや列車の部品。血まみれになって動けない人、そうでない人。

亡くなっているのが一目瞭然な、人体の一部。

地元の消防団員だった叔父は、救急隊に加わって救助活動にとびまわった。それが、後に訪れる恐怖体験のはじまりだったのだ。

ケガ人の救助が終わると、事故現場の検証や片付けと平行して、バラバラになった遺体の回収作業がはじまった。どういう状況だったのか、バラバラになった遺体には事故現場から数百メートルも離れた場所まで飛ばされたものもあった。

遺族の気持ちを考えると、たったひとつの肉片さえ見逃してはならないという思いがしたと言う。やがて雨が降り出した。叔父は雨具も身に付けず搜索を続けた。

手、足、指、胴体の一部らしきもの、生々しい血痕の衣服・・・様々な被害者をみつけた。その中に、小さな子どもの右足が落ちていた。

こんな小さな子まで・・・なんて可哀想に・・・

とっさに叔父はそう思った。

その晩、帰宅した叔父は哀しい事故の様子を奥さんに話した。小さな子どもまで巻き込まれた列車事故に、奥さんも同情の声をあげたと言う。暗い気持ちで布団に入った夜中過ぎ、救助活動でヘトヘトになって熟睡してしまった叔父は、不思議な気配にゆり起こされるように目が覚めた。

いつもこんな時間に目が覚めることはない。夢うつつのまま天井を眺めていると、隣りの居間で物音がする。この家には奥さんと、叔父の二人しか住んでいない。その奥さんは一緒の部屋で眠っているというのに。

じゃあ、居間にいるのは一体ダレだろう・・・？

よく耳をすましてみると、物音は ペタッ ペタッ、と、人が歩く足音のようだ。

ペタッ ペタッ ペタッ・・・

ペタッ ペタッ ペタッ・・・

足音はずうっと居間を静かに歩き回っている。

幽霊やお化けなんか全く信じていない叔父は、部屋にあった「肩たたき棒」を持って居間につながる襖を、そっ・・・と開けた。

だが、誰もいない。居間は静かに薄暗いままだ。

おかしいな？

怪しみながら電気をつけようとした時、叔父は素足で踏んだ冷たい感触に ギョッ!! とした。

電気をつけてみると、畳が所々濡れている。それはまるで小さな子どもの足跡のように、部屋中、一面に。

さすがに背中がゾツとして、叔父はそのまま布団にもぐり込んで朝を待った。

朝になって、奥さんに夕べの出来事を話しても信じてくれない。もちろん、足跡も残っていない。でも、それから毎晩のように足音が聞こえるのだ。一人で居間を覗くことも、怖くてできない。

この話しをしてくれた数年後、叔父は交通事故で右足を失った。毎晩、居間を歩き回る足音が、あの「列車事故に巻き込まれた子ども」だとはひと言も口にしなかったが、以来、叔父は亡くなるまでずっと、魔除けのお守りをを身につけ、居間には「おふだ」を祭っていた。

本当にあった、怖いお話。

マムシの祟り・・・？

そこは由緒ある大きな神社で、毎日色んな参拝客が訪れる。観光目的でやってくる人もあれば、お祓いや御祈禱をする人もいて・・・フツーではちょっと考えられない悩みを抱える人たちも相談にやってきた。

これは、そこで体験した怖いお話のひとつ。

神社の本殿の勝手口で片付けをしていた時のこと。御祈禱する神主さんたちが身支度を整える部屋に、祝詞や尺を保管しておく机があり、その下に変なふるしき包みを発見した。

埃だらけであんまり汚いので、引っぱり出してみると、かなり重い。
不思議に思ってふるしきを解いてみると、それはマムシの焼酎漬けのビン。
そこに古参の巫女さんがやってきて、顔色を変えた。

触っちゃダメです!! 蛇に祟られますよ!

はあ？

意味がわからずボケづらしているわたしに、彼女はその焼酎漬けの由来を教えてくれた。

彼女が神社に勤め始めて間もない頃、一人のおじさんが御祓いにやってきた。悩みは「蛇の祟り」。手には「マムシの焼酎漬け」を抱えていた。

おじさんは蛇捕りが趣味で、特別「マムシ」を捕るのが好きだった。捕まえた「マムシ」は皮を剥いで丸焼きにしたり、焼酎漬けにしたりして、病気や怪我をした際の薬代りにしていたのだ。

半年位前、大きな「マムシ」を一匹捕まえたので、焼酎漬けにしようとビンに入れた。「マムシ」の焼酎漬けを作る時、普通は2週間～3週間くらいビンに閉じ込めたまま、水だけを少し入れて、排泄物などを出させるのだそうだ。やがて蛇が弱って死ぬと、そこでやっと焼酎漬けにする。

ところが、その時に限っておじさんは、捕まえたばかりの蛇を生きたまま焼酎漬けにしてしまった。

それから、不幸なことばかりが続いた。まず奥さんが事故で亡くなり、元気だったお子さんが病気で入院。仕事はうまくゆかず、自分自身も腰を痛めて半身不随状態に陥った。

さらに恐ろしいのは、毎晩「何か」に首をしめられたように苦しいのだそうだ。あまりに嫌なことばかりが続くので、おじさんは評判の「拝み屋」に相談した。すると「拝み屋」のおばあさ

んが、

あなたの首には大きな蛇が巻きついている。どこかで祓ってもらった方がいい

と告げたのだ。

今まで沢山の蛇を捕まえてきたものの、こんな経験は初めて。思い当たったのは、生きたまま焼酎漬けにしてしまった「マムシ」だった。

お祓いをしてもらった後、そのおじさんは「マムシの焼酎漬け」を神社に置いていった。家に持ち帰るのは怖いから、ここで処分してくれ、という。

捨てるに捨てられず、それ以来「マムシの焼酎漬け」は神社にあるのだろう。

ちなみに、幾度かその焼酎漬けを処分しようとしたらしいが、関わった人たちが不慮の事故や、病気、怪我にみまわれ、今では誰も触わないのだそうだ。

信じられないような、怖い話。

いつもの店で

お昼休みに、いつも立ち寄る店があった。

職場の近くで値段も手頃だし、ランチもけっこう美味しかったので、同僚と一緒に毎日のように利用していた。広いガラス張りの店内は、昼休み時間ということもあっていつも混雑していたのだが、その中に、必ず同じ窓際の席に座って外を眺めている女の人があった。

彼女は綺麗なロングヘアの、サングラスをかけた若い女性で、いつもひとりで外を見ている。

今考えるとちょっと変な感じだが、その頃は別段気にしていなかった。ジロジロ見るのも失礼だし、わたしと同じようにランチを食べに来てるんだな、ぐらいにしか思っていなかったからだ。

わたしがその女性を注意して見るようになったのは、初夏の頃だったと思う。女の方は相変わらず同じ席に座って、毎日同じような長そでのシャツを着、サングラスをかけて外を眺めながら、ブツブツと何かを喋っているようだ。

毎日、毎日、サングラスの彼女は店にいた。そんなある日、いつものように店に入ると例の奇妙な女性が見当たらない。

あれ、あの女の人、いない。

ふと、そんなことを思ったが、ちょうど仕事も忙しかったので、それ以上深く考えることもしなかった。その日は久しぶりに遅くまで残業をし、帰宅する為に電車に乗ったのは、夜の10時頃。アパートに着いたのは11時を過ぎていたと思う。部屋の鍵を開けたときだ。

・・・すみません

不意に背後から声がして、わたしは心臓が飛び出すくらいビックリした。振り返ると、レストランでいつも見かけるサングラスの女性が立っている。

わたしは息を飲み、年甲斐もなく背筋に冷や汗を感じた。

女の方は無表情のまま、わたしに顔を近づけてきた。彼女は夜だというのに相変わらずサングラスをかけているので、その下にどんな両目があるのかは判らない。どんな目つきでわたしを見ているのかも判然としない。それがことさら恐ろしく感じられた。声も出せずに立ちすくんでいるわたしの目の前で、女の方はゆっくりとサングラスをはずそうとしたのだが・・・。

この人と目を合わせちゃダメだっ・・・!!

何故だか咄嗟にそう思ったわたしは、部屋に飛び込んでカギをかけた。外は静かで、何も起こらない。ドアの外に例の女性がいるのかどうかもわからなかったが、その晩は一睡もできなかった。

数日後、わたしはアパートを引き払った。またあの女がやってくるかもしれないと思うと、怖くて住んでいられなかったからだ。一緒にランチを食べに行っていた同僚に引っ越した理由を聞かれたので、例の店にいたサングラスの女のことを話したのだが、同僚はそんな女は見たことがない、というのだ。

水子地蔵

ある友人が赤ちゃんを産んだ。これは、その友人が体験した不思議で怖いお話。

友人sの赤ちゃんはとても元気な子で、風邪ひとつひいたことがなかった。ところが、5カ月を過ぎた頃から夜泣きが酷く、母親であるsは毎日睡眠不足に悩まされるようになった。

育児休暇のとりにくい職場だったので、sは出産後2カ月から職場復帰していた。子どもの夜泣きが始まって2~3カ月は何とか頑張っていたが、4カ月目にもなると体調を崩し、職場でもミスが目立つようになった。

大好きな仕事だし、経済的にも退職するわけにはいかない。かといって、そう頻繁に休暇もとれない。

sがあんまり青白い顔をして出勤してくるので、面倒見のいい上司の一人が、心配してワケを訊ねた。子どもの夜泣きで睡眠不足が続いている と話すと、上司は労いの言葉をかけてくれたという。

そんなやり取りをした3日後、子どもの夜泣きはピタリと止んだ。久しぶりに熟睡し、このまま夜泣きがおさまってくればいいな、と考えていると、次の日も次の日も、子どもは朝までスヤスヤ眠ってくれたのだ。

やっと夜泣きから解放された!! 熟睡できるようになったおかげで、職場でのミスもなくなり、顔色も良くなったある日、sを心配してくれた例の上司が、ニコニコしながら話しかけてきた。

上司はsに、子どもさんの夜泣きが治って良かったな、と言い、それから、こんなことを告げたのだ。

上司は、近所のG寺に祭られている水子地蔵に、「夜泣き封じ」の願をかけたのだそうだ。それはこの地方に古くから伝わるまじないで、家族以外の第三者が三日間、誰にも内緒で午前零時過ぎに水子地蔵の前にお菓子などを供え「夜泣き封じ」の願をかけるというもの。

上司のお子さんが赤ちゃんの頃、やっぱり夜泣きが酷く、近所のおばあさんが「夜泣き封じ」の願をかけてくれたおかげでピタリと治ったという経験があり、もし治れば儲けモノ程度の気持ちで、願掛けをしたのだという。

そんなことで夜泣きが治ったとは思えなかったが、自分の為に三日間も夜中に願掛けをしてくれたことには素直に感謝した。

ところが、上司は続けてこんなことを言った。

「夜泣き封じ」の願が叶ったら、それを告げられた母親は7日以内に、願を掛けた同じ時間の午前零時過ぎ、一人でお供物を持って水子地蔵へお礼参りにいかなければならない、と。

上司は、7日以内に必ずお礼参りするようにと告げ、立ち去った。

sはどうしようかと思ひ悩んだ。G寺の水子地蔵は家からそう遠くないが、夜中にそんな場所へ一人で行くなんて怖くてできない。それに、上司の願掛けのおかげで夜泣きが治ったとも思えなかった。旦那さんに相談すると、案の定、行く必要ないと言われた。

1日、2日、3日と、sはお礼参りに行かなかった。4日目の日に、職場で例の上司から お礼参りは済んだか、と訊かれたので、もう行ってきました、とウソをついた。

それから一週間ほど過ぎ、「夜泣き封じ」のことなんか忘れた頃、あの上司が会社を休んだ。次の日も次の日も職場に顔を出さないの、どうしたんだろうと思っていると、同僚の一人がお見舞いのお金を徴集して回ってる。

理由を尋ねると、例の上司が入院し、職場復帰するには時間がかかりそうなので、代表の何人かでお見舞いに行くという。sはなんだか嫌な感じがした。上司は執拗に「お礼参り」に行くよう言っていた。自分がウソをついたことで、上司に祟りでもあったのではないかと思ったのだ。

次の日、お見舞いに行った同僚から上司の様子を聞いた。上司は全身に「おでき」のような水膨れができ、原因がわからず入院したとのこと。顔や首や手の甲にも「おでき」ができ、かなり憔悴しきった様子だったそうだ。

これはマズイと感じたsは、気の進まない旦那さんに訳を話し、零時過ぎに水子地蔵に参拝して必死で謝った。それが利いたのか、上司は元気になり、職場に復帰したそうだ。

本当にあった怖い話。

その日、わたしは親戚の法事に招かれ、山あいの集落を訪れていた。法事のあと宴会で盛り上がり、帰り支度を始めたのは夜の7時頃。この時間なら最終バスに余裕で間に合う。

民家もまばらな道を歩いて行くと、街灯の下にバス停らしきものが見えた。バス停にはベンチが一つ置いてあって、バスを待つ人のために屋根がついている。

その待合所には先客がいた。大きなバックを膝に乗せた女の人で、うつむき加減にベンチの左すみっこに座っている。セミロングの髪が両頬にかかっていたので、人相はよくわからない。わたしは相手に軽く会釈すると、ベンチの右はじに座った。

バスが到着する時間までは30分以上もあった。民家は遠く、車も通りらない。聞こえるのは、うるさいほどのカエルの大合唱だけ。

しばらくすると、あいだをあけて座っていた隣の女の人が、バックをガサガサやりながら何かを取り出した。彼女は何度も何度もバックから何かを取り出すと、口元へ運んで行く。私は前を向いたまま、チラリと盗み見るように視線だけを動かした。彼女がバックから取り出しているのは、お菓子の「ポッキー」のようだ。わたしは視線を戻し、カエルの大合唱に耳を傾けた。

何分か経った頃、先客の女性はまたバックをガサガサやり始めた。どうやら新しい箱を開けているようだった。さっき開けたポッキーは全部食べてしまったのか、前を向いたままでも、視界の端で彼女がうつむき加減にポッキーを食べているのがわかる。

ややあって、彼女はまたバックをガサガサやった。それからお菓子の箱を封切っているような気配がして、ポッキーが取り出され、彼女はうつむき加減に、黙々と食べ続ける。

よほどポッキーが好きなのか、それとも、お腹がすいているのか知らないが、6箱目のポッキーを封切る頃には、ちょっと薄気味悪くなってきた。わたしは相手に気付かれないよう、彼女の手元からその顔に視線を移し・・・うつむき加減の女の横顔を見た瞬間、わたしはパニック状態になっていた。

てっきり「食べている」と思っていたポッキーは、飲み込みもせず口に突っ込んだままになっていたのだ。女の口には、6箱分のポッキーが束っになって突き出し、口の両端からは溶けたチョコレートが血のようにキラキラと流れていた。

わたしは見てはいけないモノを見てしまったような気分になり、それから、急に怖くなってきた。わたしがそっと視線を戻そうとしたときだ。それまでポッキーを貪っていた女がゆっくりとこ

ちらを向き、その刹那、目が合ってしまった。やけにギトギトした異様な眼光は、未だに忘れられない。わたしは何も考えられず、とにかくその場から走って逃げ出した。

あの女が何だったのか、いまだにわからない。

人か、魔物か、妖怪か・・・ありえない怖い話。

アルバイトでの怖い話

これは学生時代、山中湖で住み込みのバイトをしていた時のお話。

バイト先は山中湖の平野という場所にある大きな民宿だった。民宿とは言え、利用するのは大学や高校の夏合宿がメインで、体育館やテニスコートなどもあり、規模的にはかなり大きなもの。ここは友人の親戚で、わたしは友人に誘われて7月初頭から8月末まで働く予定になっていた。

民宿にはコンクリート4階建ての本館と、木造の建物が4つほどあり、一階部分が通路で繋がっている。本館はかなり大きく、各階には廊下を挟んで部屋が10室ずつあった。

住み込みで働く人たちは数人でグループになり、駐車場の脇に建てられたプレハブ小屋に寝泊りしたが、わたしと友人は本館4階の非常階段横に設置されたプレハブに泊まることになった。ここは他より待遇の良い場所だ。駐車場のプレハブ小屋は木影が無く、昼間は容赦ない太陽がキラキラ照りつけてサウナ状態になるのに比べ、このプレハブは地上から離れているうえに木影があり、昼間も快適に過ごせた。

8月に入った頃、友人は急に里心がついて休暇をとりたいと言い出した。民宿には東京から来た剣道部が20名ほど泊まっているだけで、予約もなかった。ちょうど暇ということも幸いし、友人は3日間休みをもらって家に帰ってしまい、わたしは一人でプレハブ小屋に泊まる事になった。

民宿での仕事は朝早くから始まる。午前4:30には食堂に降りていって、朝食の準備にとりかからなくてはならない。なので、お昼御飯を食べた後、12:30から午後3:30までバイトは休憩時間に入り、みんな疲れて昼寝をするのだ。

友人が家に帰ってしまってから3日目の午後、わたしは早朝からの仕事でくたびれきって昼寝をしていた。ふと目を覚すと、室内がやけに暗い。ゴロゴロと雷の音が聞こえた。夕立ちがくる前の、薄暗く、湿っぽい感じがした。

時計を見ると、まだ3時。仕事開始めまで30分はあったが、雷の音もだんだん近くなるし、小屋のトタン屋根にバタバタと雨も降ってきたので、下に降りて行くことにした。

いつもなら、非常用の螺旋階段を使って降りて行くのだが、この外付けの非常階段には屋根がない。夕立ちはかなり激しく降っていたので、わたしは本館の階段を使う事にした。

わたしと友人が4階のプレハブ小屋を使っているのですが、この階の非常扉には鍵がかかっていなかった。扉を開けると、本館4階の廊下がまっすぐ伸びている。唯一の宿泊客である剣道部の学生は離れの木造に泊まっていて、本館には誰もいない。お客さんがいないので、電気もついていな

いし、各部屋のドアは空気がこもらないように開けばなしになっていた。薄暗く、まっすぐ伸びた廊下の突き当たりに階段があり、わたしがそこを目指して歩いていくと、客室のドアの前を通り過ぎるたび、両端の部屋の窓から雷の光が目の端に見えた。

廊下はやけに長く感じられ、わたしはまっすぐ前だけを見て歩いていた。各部屋は廊下を挟んで左右対称になっているので、両側のドアはそれぞれ同じ位置にある。ドアの前を通ると、両側の目の端に、なんとなく左右の部屋の内部が見えた。ひとつ、ふたつ、みっつ、長い廊下に苛々しながら歩いて行くと、6つ目のドアの前を通り過ぎた時、左側の部屋に誰かがいた。

小さな子どもがこちらに背を向けて、テレビの前に座っている光景が、確かに目の端に見えたのだ。

わたしは立ち止まり、もう一度部屋を覗いた。テレビの前に確かに子どもが背を向けて座っている。部屋の入り口には小さな運動靴が一足、きちんと揃えて置いてあった。電気もつけない部屋に、小学生低学年くらいの子供が一人で座っているのだ。

テレビではワイドショーをやっていたが、音は聞こえない。この民宿には子どもはいないし、親戚の子が遊びに来る、なんて話も聞いていなかった。どこの子だろうと思いながらわたしが声をかけると、その子はわたしに背中を向けたままテレビの電源を消した。

何にも映っていないブラウン管に、前向きの子どもの上半身が反射して見えた。白いTシャツに紺色の半ズボンをはいて、体育座りをしている子ども。それを見て、わたしは違和感を覚えた。洋服や手足はかなりハッキリ映っているのに、顔だけが不自然にボヤけてよくわからない。わたしの心に湧き上がってきた恐怖が合図だったように、その子が首だけを動かしてこちらを振り向こうとした。

わたしはゾツとしてその場から逃げ出した。背後では、あの子どもがドアから首だけを出してこっちを見ているような気がして、とても振り返れない。後ろを絶対に見ないようにして階段まで辿り着くと、転びそうになりながら駆け降りた。頭上の階段の手すりから見下ろされているような嫌なプレッシャー、あの時の恐ろしさは今でも感覚的に残っている。

すでに仕事を始めていた民宿の奥さんに不気味な子どものことを話すと、近所の子どもが勝手に入ってるのかもしれないからもう一度確認してきて、と言われたが・・・わたしは絶対に嫌だと言って断わった。それで、遅れてきた他のバイトが見に行っただが、猫の子一匹見当たらなかったようだ。

3日ぶりにバイトに戻ってきた友人にその出来事を話すと、笑い飛ばされた。だが、そのあと急に

真顔になって、去年バイトに来た時も同じような経験をした人がいたと教えてくれた。

その人はバイトを続けられなくなって、辞めてしまったそうだ。

真夜中のエレベーター

よく遊びに行く、仲のいい友人がいた。

友人は10階建てマンションの9階に住んでいて、仕事が終わった後「今から遊びに来ないか？」と誘うのだ。暇な時はわたしもその誘いに乗って、よく友人のマンションに遊びに行ったのだが、マンションに着くのはいつも午後11時過ぎか、遅い時には午前0時を回る事もあった。

10階建てのマンションだから、もちろん、エレベーターがついている。定員8名の、狭いエレベーター。扉には細長いのぞき窓がついていて、各階を通り過ぎる度に、その窓からエレベーターを待っている人や、廊下を歩いている人が見える。

その日も午後10時半過ぎに誘いの電話があって、わたしは出かけることにした。夜遅いので、マンションの入り口には人影もなく、シンとしている。

9階のボタンを押してエレベーターが降りてくるのを待っていると、扉の上に付いている3階を示す電気がピカッと光って、しばらく動かなかった。誰か乗ってるのかな、そんなことを考えていると、やがてエレベーターが降りてきた。てっきり3階から人が乗ったと思っていたわたしは、少し目を反らしてドアが開くのを待ったのだが・・・静かに開いたエレベーターには誰も乗っていない。青白い蛍光灯だけが、狭いエレベーターを寂し気に照らしているだけだ。

アレ？

ちょっと拍子抜けしながらも、わたしはエレベーターに乗り込んだ。その時、わたしの背後から誰かが横をすり抜けてエレベーターに乗った気がしたので、周囲を見まわした。でも、誰もいない。不思議な気分で9階のボタンを押し、エレベーターが動き出した。

2階、3階、とエレベーターは何事もなく昇っていった。各階を通り過ぎるたび、扉についた細長い窓からそれらの廊下が薄暗く見える。すると5階を過ぎた時、廊下に誰かが立っていた。距離があったので詳しくはわからないが、確かに小さな人影が立っていた。エレベーターはさらに昇っていく。

6階を過ぎ、7階を過ぎ、8階を過ぎた時、やっぱり廊下に小さな人影が立っているのが見えた。今度はさっきよりもっと近く、廊下の電気に照らされて、それがボーダーのTシャツを着た子どもだということがわかった。

こんな時間に、子ども？

ちょっと不審な気もしたが、その時はあまり深く考えなかった。やがてエレベーター数字が9階を

示した。降りようと思ってドアの真ん前で待っていたわたしは、エレベーターが止まらずにスウッと昇っていくのでギョツとした。

あわてて9階のボタンを何度も押したが、エレベーターはそのまま最上階の10階まで昇っていく。故障したのかと焦っていると、エレベーターが10階で止まりドアが開いたので、わたしはそこで降り、エレベーター脇の階段を使って9階へ戻ることした。こんな夜遅くに、またエレベーターが止まらなかったら困るからだ。

エレベーターを降りてすぐ左脇の階段へ体の向きを変えた時、視界の隅にエレベーターのドアが閉まるのが見えたのと、サッと血の気が引いたのは同時だった。

誰も乗っていないはずのエレベーターの中に、白目をむいたのTシャツ姿の男の子が立っていたように見えた。思わず立ちすくんだが、エレベーターが完全に閉まる前にわたしは駆け出した。

飛び降りるように階段をくだって9階の廊下に足がついたとき、エレベーターが10階から降りてくる気配がした。わたしはそのまま友人の部屋を目指して走り、インターホンを押しまくった。友人はのんびり返事をしながら、なかなかドアを開けてくれない。エレベーターのドアが開くのが判ったので恐々そっちを見ると、誰も乗っていない。でも、早くその場から逃げ出さなければいけないような、自分の方にどんどん迫ってくる危険な気配を感じる。本能が早く逃げろとサイレンを鳴らしているようだった。

早く!早く!早くっ!

心臓バクバクになりながらインターホンを押し続けると、やっとドアを開けてくれたので、わたしは友人を押し倒すような勢いで中に入ると、ドアを閉め、鍵をかけてチェーンもした。その普通じゃない様子に友人は怪訝な顔つきをしたが、質問することはできなかった。なぜなら、すぐに部屋のドアをノックする音がしたからだ。

最初は

コン コン・・・

だったノックの音は、だんだん激しくなり

ドン ドン ドンッ!! ドンッ ドンッ ドンッッ!

と、ドアが破壊されるんじゃないかと思うくらい凄まじくなった。

わたしは鍵とドアノブをきつく押さえたまま、ギュッと目をつむっていた。脳裏には、あの白眼をむいたボーダーTシャツの男の子の姿がイヤでも浮かぶ。その状況にビククリして声も出なかった友人は、怖さのあまりか、腹がたってきたのか、しまいにはドアの外の誰かに向かって

やめろおっっっ!!

と、大声で怒鳴った。すると何かが腐ったようなツーンとした臭いのあと、外は静かになり、そのまま何の音もしなくなった。

しばらく二人とも黙って様子を伺っていたが、ドアを叩く音はそれきりおさまって、シーンと静かになった。その夜、わたしは友人の部屋に泊めてもらって、さっき経験した出来事を話した。こんなことは信じない友人も、青白い顔のまま黙って聞いていた。

今でも、友人は例のマンションに住んでいる。別段変わった事は起きていないようだが、わたしは夜中に友人の部屋に遊びに行くのはやめた。もし行くとしても、友人にマンションの入り口まで迎えに降りてきてもらうことにしている。

雪の夜の怪奇

雪が降ると、子どもは嬉しいもの。

誰も足跡をつけていない真っ白な雪の上を歩いたり、雪遊びをしてみたり。

これは私が子どもの頃、弟と一緒に体験した話だ。

その日は朝から雪が降っていた。私と弟は外で遊びたくてウズウズしていたが、雪がやむまで待ちなさい、という母の言葉に従って、家の中で一日おとなしく遊んでいた。冬の夕暮れは早く、5時といえば暗くなってくる。その日、雪がやんだのは5時を過ぎていた。

雪がやんだので、わたしと弟は外に出たくてたまらなくなった。母から、一時間だけ、という了解をもらってわたしたち兄弟は外に飛び出して行った。

薄暗くなっても世界は一面の銀世界。降り積もった真っ白な雪のおかげで、そんなに暗くは感じない。当時、わたしたちが住んでいた家は田舎だったので、家の前には田んぼが広がっていて、車も少なかったせいか、道も、田んぼも、何の足跡もなくただ真っ白な雪原だった。

わたしたちは嬉しくて、誰も足跡をつけていない田んぼを歩きまわった。フワフワした雪に、自分たちだけの足跡がどんどんついていく。家の前の田んぼはすぐにわたしたち兄弟の足跡でボコボコになった。でも、もっと足跡をつけたくて、道向いの田んぼの方まで足を延ばすことにした。

道向いと言っても、わずか2mばかりの狭い道路を挟んでのことだから、家はすぐそこに見える。そこもやっぱり真っ白で、何の足跡もついていない。たった一つの街灯が雪の田んぼを青白く輝かせていた。

道から田んぼを眺めたわたしたちは、足跡で顔を描こうという話になった。スマイル君のような顔を二人の足跡で描くことにしたのだ。どっちがどの部分を担当するか決めた後、わたしたちは田んぼに入って夢中で足跡をつけた。頭の中で完成図を想像しながら、足下と、自分の通った痕跡だけを確認めながら、夢中で絵を描くのに没頭した。

絵が完成するのに、15分もかからなかったと思う。それぞれの担当が終わると、わたしたちは道に戻って出来上がった絵を確認めようとした。ところがそこで、わたしたち兄弟はおかしなものを見てしまったのだ。

二人で道に並んで田んぼを見た時、わたしたちは同時に息を飲んだ。それから二人で顔を見合わせて、もう一度田んぼに視線を戻した。

わたしたちが足跡で描いた顔の向こうに、着物姿の、花嫁さんが立っていたのだ。

白無垢の花嫁衣装を着て、日本髪に角隠しをつけた花嫁さんが、青白い雪の田んぼに一人で立っている。わたしたちがここに来た時、もちろん、花嫁さんなんていなかった。その花嫁さんの周りにはわたしたち兄弟の小さな足跡がついているだけで、花嫁さん自身が歩いてきた足跡がどこにも見当たらない。

わたしたちは家を目指して同時に駆け出していた。家の明かりはすぐそこに見える。悲鳴に近い声を出しながら玄関に飛び込むと、母がビックリして出て来た。二人で見た出来事を話すと、母は笑って済まし、外を確認もしてくれなかった。

高校生になった時、弟とあの雪の夜の出来事を話す機会があった。

あんな所に角隠しの花嫁さんが立ってるなんて驚いたよね

と、わたしが言うと

いいや、花嫁衣装は着てたけど、首は無かったよ

と、弟が青ざめて答えた。

そこで改めてわたしはゾッとしたのだ。

マンションの不思議な話

ある友人が携帯電話を持たなくなった。それから、引っ越したばかりの都心のマンションを引き払って、高給で待遇も良かった大手の企業を退職し、田舎の民家を買って自家製の野菜を作り、日雇いのアルバイトをしながら暮らすようになった。

彼はコンピューター関係の技師で、才能もあり、とても都会的な匂いのする一流のサラリーマンだったので、その変貌ぶりを友だちはみんな不思議がった。彼が畑仕事をしたり、日雇い労働で真っ黒に日焼けする姿など、とても想像できなかったからだ。

友だち数人と、彼の新居である田舎の家に遊びに行った時、わたしたちは彼に、せめて携帯電話ぐらい持ってくれ、と頼んだ。家に電話しても留守が多く、飲み会の誘いや、毎月やっている同級会の連絡をするにも不便だったから。ところが彼は、用事がある時は留守電にメッセージを残しといてくれれば自分から連絡する、と言ってokしない。それどころか、携帯電話なんか使わない方がいい、と、わたしたちにしつこく説教するのだ。田舎に引っ越すまでは、仕事用とプライベート用の携帯電話を二つも持っていた彼が、どうして急にこんな時代錯誤になってしまったのか理解できなかった。

彼はその訳をこう説明した。

通勤の便のいい都会のマンションに引っ越してからというもの、どうも頭がおかしくなったらしい。マンションに帰るとイライラして落ち着かないし、彼女とも喧嘩ばかりする。喧嘩の理由は些細な事で、新しいマンションに引っ越すまでは喧嘩にもならないありふれた言動だったのに、どうでもいい事でお互い頭にきて、罵り合いがはじまり、結局、別れるハメになった、と。

それと携帯電話を持たないことと、どんな関係があるのか、私たちは頭をひねりながら黙って聞いていた。すると彼は、友だちの携帯電話を胸ポケットからぬき取って、おもむろに電源をOFFにってしまった。それから、その場に居合わせた全員に携帯電話の電源を切るよう強要する。

気の短い友人の一人がもんくを言うと、途端に彼は逆ギレして、物凄い剣幕でわめき散らした。まるで発狂でもしたような様子に、わたしたちは面喰らってその家から逃げるように帰ったのだ。

そんなことがあってから数日後、わたしは彼の元彼女に偶然出会った。彼女は同級生で、二人が学生時代から付き合っているのは友だちみんな知っていた。この間、久しぶりに元彼(例の友人)に会ってきたよ、とわたしが言うと、彼女はちょっと嫌そうな顔をした。

そのことで同級生の何人かから電話があって、どうして彼がああなってしまったのか、どうして

二人が別れたのか訊かれたのだそうだ。彼女はこう答えた。

仕事場まで車で10分程度の都会のマンションに引っ越しが決まった時、彼も、彼女も、とても喜んだ。それまでは通勤に2時間以上もかかる場所に住んでいたのだから、デートする時間も削られるし、体力的に彼も苛ついていて、結婚を考えていた二人はお互いが一緒に共有できる時間をできるだけ長くとりたいたいと思っていた。新しいマンションではそれが叶う。公園が目の前の、2LDKのマンションは経済的には厳しいものだったが、結婚を考えていた二人は、子どもが生まれた後のことを念頭に置いてそのマンションに決めた。

引っ越しと同時に、二人は同棲をはじめた。最初はいい感じだったのだそうだ。それが3~4日経つうちに口喧嘩が多くなり、他愛もないことでぶつかるようになった。それまで別々で暮らしていた人間同士が同じ屋根の下で暮らすのだから、価値観の違いに気付くというか、相手の知らない一面を見たような気がして喧嘩になるのよ、と親友に言われたらしい。彼女自身もそう思ったのだが、どうも、それだけではないような感じがする。

そのマンションに住むようになってから頭痛がしたり、お互い訳もなくイライラしたり、朝もすっきり目覚めることができなくなっていた。体はだるく、ゆったり新居での生活を楽しむ気にもなれない。彼は仕事から帰ると、この部屋に入ると気分が悪くなる、と言って、ひとりで外へ出かけてしまうこともあった。さすがに彼女も頭にきて、そこでまた喧嘩が始まる。そんなことを繰り返していたある日、彼のケータイに変な電話がかかってきた。彼に言わせれば見覚えのない電話番号で、そんな電話が朝早くから夜中過ぎまで、マンションにいる間中ひっきりなしにかかってくるようになった。気味が悪いのは、相手の電話番号がすべて違うことだ。知らない電話番号だと言って彼はずっと無視していたが、夜中の3時過ぎにかかってきた電話にはさすがに腹を立て、はじめて受話器をとった。

同じ部屋で眠っていた彼女もその電話の音に目が覚めた。電話越しの相手に、彼はすっとんきょうな声をあげ、それから、間違い電話ですよ、と言った。

何の話だったの？

と訊ねると、どっかのおじさんが死んで、その連絡だったらしい、と答える。すると、すぐにまた携帯電話が鳴った。電話番号は、今の間違い電話の相手だ。

彼はケータイをとると

間違い電話だって言ってるだろう!!

と怒鳴った。やっと二人が眠りにつくと、またケータイが鳴った。今度はサラ金の催促の電話だった。そんなおかしな電話が毎日、毎日続いたのだ。

結局、二人の出した結論はこうだ。現代は、いろんな電波がとびかっている。ケータイ、テレビ、無線、ラジオ、果ては電子レンジまで電磁波をだしている。

それら無数の電波は人間の目には見えなくても、確実にこの大気中をうめ尽くしているのだ。その無数の電波は、地軸か、磁気か、大気の関係か、あるいは建物の構造や立地条件などによって、歪んだり、ある一点に集中したりすることがあるのかもしれない。このマンションのこの部屋は、そういったものが集中してしまう「歪んだ場所」なのかもしれない、と。だから身に覚えのない電話がかかってきたり、精神的にも不安定になるのではないかと。

しかし、そういう結論が出たとしても、もう彼女は彼と結婚する気はなくなっていた。同棲してから見てきた様々な彼の姿に、すっかり幻滅してしまったのだそうだ。

もしかしたら彼本人が言った通り、本当に頭がおかしくなってしまったのかもしれない。

こんな話、信じられますか？

訪ねる人

何年か前、絶版になってしまったマンガを探しに水道橋の古本屋街をハシゴしたことがある。

ビルとビルとの間に歴史を感じさせる小さな古本屋があって、何気なく入ってみると、目当てのマンガが全シリーズ揃って置いてあり、わたしは嬉しくなって全巻買い求め、スキップしたい気分で家へ戻った。

同じマンガのファンだった友人にメールで知らせると、仕事帰りに遊びに行くという返信が届いた。わたしは友人が来る前に全部読んでしまおうと、コーヒー片手にマンガを読みふけた。

全部で7巻のマンガを5巻目まで読んだ時、ブックカバーがやけに厚いことに気がついた。前の持ち主が几帳面だったのか、このマンガの全巻には元来のブックカバーの上からビニールのカバーがかけられていて、丁寧にセロテープでとめてある。

だが、5巻目のブックカバーだけは他のに比べて厚みもあり、少し重いのだ。カバーと本体の間に何か入っている、そう思ったわたしは、ブックカバーをはずしてみた。

出てきたのは茶封筒だった。封筒の中にはメモのような物が折りたたんで入っており、それを取り出そうとした時、数枚の写真と一緒にこぼれ落ちた。

拾い上げてみると、女の人の写真だ。一人で写っているものもあれば、数人で写っていたり、街を歩いている姿を遠くから写したようなものもあった。写真に写っている女性はみんな違う人だったと思う。気味が悪いのは、どの写真も、必ずひとりだけ顔の部分が切り取られていることだった。

イヤ〜な気分だったが、メモに何が書いてあるのか気になった。そこで、内容を確認するためにメモを広げると、今度はそのメモの間から小さな紙が落ちた。何枚もの小さな紙は、どうやら写真から切り取られた顔の部分のようだった。

わたしは切り取られた顔を、興味半分で先に出てきた写真にはめ込んでみた。けれど、どれもこれもピッタリ一致しない。大きさが違っていたり、明らかに写真の材質や色合いが違って、顔と写真は一枚も完全にはまらないのだ。

メモには これを読んだ人は連絡を下さい と短いメッセージが書かれてあって、電話番号が記載されていた。そこへちょうど友人が遊びに来た。わたしが写真とメモを見せると、友人はおもしろがって電話してみようと言う。わたしは気持ちが悪いからやめた方がいいと反対した。

友人はその時は諦めたフリをしてマンガを読んでいた。しかし、わたしがトイレから戻ってく

ると、友人が部屋の電話を使って誰かと楽し気に話している。あんまり楽しそうに話している
ので、最初は友だちと話しているのかと思ったのだが・・・電話は一向に終わる気配がなく、天
気のことだとか、最近話題のニュースだとか、とりとめもなく会話がはずんでいる。わたしは隣
で友人をつっついて「誰と電話してるのか知らないが、いい加減に切れよ」と耳打ちした。友人
は相づちを打ちながら、わたしの住所と電話番号を相手に告げて受話器を置いた。

何だか胸騒ぎがして、今の電話の相手が誰だったのか問いただしてみると、例のメモの電話番号
にかけてみた、とあっけらかんと言うのだ。わたしはギョッとし、怒りが込み上げてきた。

見ず知らずの人間に、しかも、あんな気持ちの悪い写真を持っていたような奴に、どうして勝手
に住所や電話番号を教えるんだ!

そう怒鳴っても、友人は平気な顔をして、けっこう普通の優しそうなおじいさんだったよ、と言
うのだ。友人は何ごとも無かったようにマンガを読み終えると、さっさと家に帰ってしまった。

その夜、10時を過ぎた頃、不意にインターホンが鳴った。友人が昼間かけた電話のことが気にな
っていたので、わたしは無視していた。ところがインターホンはしつこく何十回も鳴り続け、あ
げくにドアをドンドン激しく叩くようになった。

さすがに近所迷惑だと思ってドア越しに返事をすると、答えたのは聞き覚えのないおじいさんの
声だ。

さっき電話をくれたあなたに届け物を持って来た、と言う。

得体の知れない者への恐怖というか、相手のありえない行動が恐ろしくなり、そんな物はいらな
いし、電話をかけたのは友人であることを告げると、おじいさんはどうしても届け物をもらって
欲しいと言い張る。20分くらいそんな押し問答をしている内に、おじいさんは諦めて帰って行
った。

ここまで邪険にされればもう来ることはないだろう、一安心してその晩は眠ることができた。と
ころが次の日、わたしが仕事から帰ってくると、隣の部屋のおばさんが声をかけてきた。親切で
愛想のいい隣のおばさんは、顔を会わせればいつも挨拶をしたり、旅行のお土産欠かさない律儀
な人で、わりと親しくしていた。

おばさんはわたしに紙袋を手渡すと、品のいい初老の男の人が渡して欲しいと言って預けていき
ましたよ、と言う。わたしは返す言葉もなく紙袋を眺め、内心ゾツとしていたが、おばさんの
手前、紙袋を受け取らないわけにはいかなかった。

心ならずも紙袋を受け取ってしまったわたしは、部屋に入って紙袋ごとゴミ箱に捨てた。だが、中身が気になって気になって仕方がない。非常識な年寄りがいったい何を持ってきたのか、確かめずにいられなくなった。わたしはゴミ箱から紙袋を引っ張り出すと、中身を確認することにした。

紙袋の中には単行本サイズの紙袋が一つ入っていて、中身は古本屋で買った例のマンガだった。同じマンガの3巻だけが一冊入っている。パラパラめくっていると、また写真が出てきた。今度は一枚だけで、やはり見知らぬ女の人の写真だ。前回の写真と違うのは、顔の部分は切り取られておらず、かわりに、目玉の部分がズブッとくり抜かれていた。

以来、あのおじいさんが訪ねてくることはないが、どこかでこっそり自分を見ているような気がして、ちょっと怖いのだ。

あなたの身の回りにもいるかもしれない、怖い人間の話。

留守電の怖い話

ちょっと前の電話器は、留守番電話を録音するためのカセットが入っていた。最新の電話を買った時、古い電話を取り外したのだが、壊れていないのでしまっておくことにした。半年ぐらい前、新しい電話のノイズがひどくなったので、古い電話器を取り出して仮に使っていたことがある。

留守電を聞く度に、テープを巻き戻して聞かなければならない昔の電話。当然、古いメッセージは上書きされて消えてしまいう。

ある晩、いきなりパソコン横の留守電が再生されたことがあった。もちろん、誰も触っていない。ガチャッ、ウィーン・・・勝手にテープが回りだして、気味悪くなった。機械類が勝手に動く話はよくあるんで、壊れたかな？ 程度の気持ちで様子を見てみると、あるメッセージが再生された。

妹が死にました。手紙を預かってるのでこれから届けに行きます。

それは仲の良かった友人からの留守電だった。しかも、3年も前の留守電なのだ。友人の妹さんはなぜかわたしによく懐いていて、3人で遊んだり、悩みごとの相談にのったりもしていた。3年前の冬、その妹さんが入水自殺をしたのだ。

当時、友人からの留守電を聞いてびっくりしたのだが、葬儀が遠方でわたし自身も都合がつかず、弔電を送っただけだった。自殺する直前、彼女はわたし宛に手紙を書いたらしく、その手紙を届けると言ったきり、友人とも会う機会がなかった。

手紙に何が書いてあったのか、未だにわからない。

そんな留守電がいきなり再生されて、とても怖くなった。再生されたのはそのメッセージひとつだけ。

改めて彼女は死んだんだと思い出して、怖いような、切ないような気持ちになった。

・・・これから届けに行きます

もしかしたら、わたしの目には見えないだけで、今この場に彼女は来ているのかもしれないと考えた。

死にたくない

不景気が続くと弱小企業の経営は厳しい。リストラされたり、ボーナスや残業手当をカットされたり。経営者もかなり厳しい選択を迫られることもある。これは数年前、弟から聞いた本当のお話。

弟は地方の個人経営の会社に勤務していた。社員は二十数名。経営はやはり厳しく、残業手当どころか給料の支払いも遅れるありさまで、転職も考えていた。

社員二十数名のうち、社長の血縁者が十数名。血縁者のほとんどは遅刻の常習犯で、他の社員たちの不満のタネでもあった。

その日、社長を含めた社長の血縁者たちは、昼を過ぎても会社には顔を出さなかった。3時のお茶の時間になっても、夕方になっても出社しない。経理の者も何の連絡も受けていない、と不審そうだった。弟はその日にどうしても社長にサインをもらう必要があったので、経理の人に「社長に連絡してくれ」と頼んだ。

経理の女性はその場で社長の携帯電話に連絡してくれたが、圏外で通じない。自宅にかけても話し中で通じない。話し中ということは、自宅に誰かがいるだろうと考え、弟は社長の自宅まで出向いていくことにした。

アテが外れ、社長宅は留守だった。ガレージには車も無く、家の中にも人の気配もない。困り果てた弟がしばらくそこで待っていると、社長の車が戻ってきた。良かった そう思っていると、社長の車の後ろからパトカーが一台ついてくる。その後ろには、社長の血縁者たちの車が何台か続いた。

社長の車から降りて来たのは奥さんで、社長本人はパトカーから警察官と一緒に降りて来た。奥さんと警察官が玄関前で簡単な会話を交わした後、パトカーは帰っていった。

一部始終を呆然と見ていた弟は、サインをしてもらうことを思い出して社長に声をかけた。だが、社長はうつろな目を向けただけで、黙って家の中に入ってしまった。事情が飲み込めない弟に、血縁者の一人が訳を話してくれた。

その日の朝、社長は会社の経営を苦にして自殺しようと思ったらしい。そこで、あてもなく山に入って首を吊るのにちょうどいい木を探して歩いていた。命を締めくくる大事な行為なので、自分の納得する枝振りが良かったのだろう。

何本も何本も見つめて歩いて、とうとう気に入った木が見つかったので、ロープを枝にかけると、大

きな影が隣の木の上で揺れている。見上げると、ガラリと伸びた手足に、真っ二つに頭を折って揺れている首吊り死体だった。

社長は腰が抜けて、その場で携帯電話を使って奥さんや血縁者や知人に助けを求めた。思わぬ先客に自殺するのも忘れ・・・というより、自分もこうなるのかと考えたらとても首を吊る気になれなくて、ぶざまにも助けが来るまでそこから動くことも出来ずにいたらしい。

以来、社長も血縁者たちも真面目に働いているそうだが、あの日サインをもらう予定だった大口の契約は流れてしまったらしい。

遊園地の怖い話

有名なF遊園地。売り物は絶叫マシンだが、その絶叫マシンのひとつに、出るのだ。

その日、友人たちは6人でF遊園地に遊びに行った。目的は、世界最速を誇る絶叫マシン。6人のうちの一人「k男」はコースター物が大の苦手で、絶対乗らないと言い張ったが、周囲は面白がって無理矢理そのアトラクションの列に並んだ。

30～40分待ったあと、ようやく自分たちの番が来た彼等は前から順番に席についた。絶叫マシンが大嫌いなk男が座ったのは前から3列目。発進する前からk男は顔面蒼白になっていた。その様子を見た友人たちは、悪ふざけのつもりでコースターが動いている間のk男をケータイのカメラで撮影する事にした。

コースターがお客で満席になると、安全バーが乗客の体を固定する。異変はその時から始まった。k男の安全バーが中途半端な位置で止まってしまったのだ。係員が乗客の安全バーが全て固定されているかチェックしに来たが、なぜかk男のことだけは見落としたりらしい。k男の隣りに座っていた友人の証言では、安全バーとk男の間は確実に20センチ以上の隙間があいていたと言うのに。

k男はパニック状態になって係員を呼んだが、ちょうどその時、派手な音楽と共にコースターが動き出した。普通のコースターは発進時、ゆっくりと坂を登っていくが、このコースターは発進直後に時速100km以上になるという優れモノ。k男も、その隣りに座った友人も、振り落とされまいと安全バーにしがみついた。

絶叫マシンはあっという間にコースを走り抜け、やがてホームに戻ってきた。k男を笑っていた友人たちも、あまりのスピードに腰がガクガクしてしまい、やっと席から立ち上がった。

自分たちがこれほどなら、k男は腰が抜けて立てないだろうと思っていた予想を裏切って、k男は誰よりも早くマシンから降りていた。そして、友人たちが全員降りるのも待たないで、さっさとアトラクションから離れてしまった。

友人たちはk男の後を追って行った。嫌がってたわりには全然大丈夫そうじゃん、友人の一人がそう言うと、k男は震えるような声で怒鳴り返した。

・・・ヘンな女が俺の安全バーを外そうとしたんだっ!!

みんなは顔を見合わせ、同時に笑ったが、k男の隣りで撮影していた友人が自分のケータイを見ながら弁護した。k男の言っていることは本当だと。

コースターが動いている間中、k男に向けられていたケータイのカメラには、k男の足元からニュッと伸びている二本の白い腕が映っていたのだ。ブレていて鮮明でもないが、やけに長いその腕は、確かにk男の安全バーを握りしめ、まるで安全バーを外そうとしているかに見えた。

あまりに気持ち悪かったので、映像はその場で消去されたが、以来、誰もk男に絶叫マシーンを無理強いしない。F遊園地に行く時は気をつけろ、それが、仲間内で密かな噂になってる。

忘れられない海外旅行がある。20年以上前、メキシコに行った時の話した。

メキシコってのは物価が安い。もちろん、レートも安価なので、日本の感覚でお金を持ってくと大金持ちって感じで。当時、友人がメキシコにいたので遊びに行った時、あまりに日本と違うのでビックリした。

メキシコの国際空港に着いたのは夜の10時を過ぎていた。成田なんかだと、夜でも電気が煌々とついていて、着陸寸前の飛行機から窓を眺めると「光りの路」みたいな感じでとても綺麗だがメキシコの空港は真っ暗なのだ。えっ、こんな所に着陸するんですか?と、ちょっと不安になるくらいの暗闇で。滑走路にともる明かりもやけに薄暗く、よく見ると、電気じゃなく、タイマツみたいに火が燃えていた。

空港内にはおでんの屋台みたいな店が数件並んでいて、裏路地の飲み屋みたいな雰囲気。だがホテルはかなりイイ感じで、中庭に綺麗な池があり、そのウォーターサイドのガーデンレストランではギターの生演奏を聞きながら安価でリッチな食事が楽しめる。

メキシコに着いた日の夜は空港近くのホテルに泊まり、翌日、友人の運転する車に乗ってわたしは彼のアパートへ行った。アパートとはいっても、日本のように6畳二間の2DKとかじゃなく、ちゃんとした一軒家。建物自体は古いが、しっかりとした石造りで、7部屋もあった。おまけに家賃は月に3千円というから驚きだ。

いいねえ、こんなにいい家が月に3千円なんて

わたしが言うと、友人はちょっと苦笑いし慣れるまで大変だったけど、と答えた。意味ありげなその返事を理解出来たのは、その夜ベットに入ってからだ。

ベットに入ってウトウトし始めた頃、妙な気配を感じて目が覚めた。目を開けると部屋の天井が見える。その天井に、びっしりと「人間」が四つん這いでくっついているのだ。

よく見ると、壁や床にも大勢の人たちが這いずり回っている。わたしは心臓が止まる思いでしばらくその光景を眺めていた。あまりに予想外な光景いや、こんなに堂々としている怪奇現象にはお目にかかったことがなかったので、状況が理解できなかったと言った方がいいかもしれない。

5分~10分くらい、ベットの上でそんな光景を呆然と眺めていたわたしは、とにかく友人の所へ行かなければ、と思いついて部屋を出た。壁や天井や床や、あらゆる場所を這いずりまわっている

人(モノ)たちは、まるで「わたしという存在」が見えていないように、ひたすら四つん這いでモゾモゾ動いている。

廊下や階段にも彼等はいた。やっと辿り着いた友人の寝室にも、同じ様に異様な光景が広がっていた。

大変だ、目を覚せ!

眠っていた友人を叩き起こすと、彼はわたしの顔、周囲の無気味な光景を見比べて、やけに落ち着いて言った。

大丈夫、べつに何もされないから

わたしは友人の寝室にいさせてもらったまま、一睡もできずに這いまわる大勢の人間たちを怖々眺めて夜を過ごした。太陽が昇り始めると同時に、彼等は蒸発するように薄くなり、やがて消えてしまった。

友人のアパートは現地でも特別格安で、それにつられて契約したものの、ありがちな訳アリ物件だったのだ。初めてこの光景を見た時は怖くて引っ越そうと考えたが、夜な夜な這いずり回る無気味な人間たちは別に悪さもせず、こちらに悪意もないようなので、そのまま住んでいると友人が言った。

メキシコに一週間滞在する予定だったわたしは、次の日からホテルに泊まることにした。無気味な人間たちも怖かったのだが、それに慣れてしまった友人の方が、ちょっと怖かった。

人間の適応能力は恐ろしい。

心霊スポットでの怪奇

山梨県の富士五湖地方に「文化洞トンネル」というのがある。かなり有名な心霊スポットで、トンネル出口の道路に女の亡霊が立っているとか、深夜に一人で運転していると女の幽霊が車の屋根にへばりつくとか、色々な噂がある。

先日、友人3人と西湖に遊びに行った時のことだ。

観光スポットをいくつか回って日も暮れ始めた頃、幽霊が出るって噂のトンネルに行ってみようということになった。薄曇りで、霧雨が降っていて、そーいう場所に行くのは最適の日。

三人でワイワイしながら車を走らせ、トンネルを通ったが、別に何も起こらない。たいがい、こーいう噂の場所ってのは何も起こらないのだ。車をUターンさせ、三回ほどトンネルを潜ったが、幽霊どころか、人っこ一人、車一台通らなかった。

すると、河口湖側のトンネル出口右側の空き地に「登山路」と書かれた小さな看板が見えた。興味本位でちょっとだけ行ってみようということになり、空き地に車を止めると、三人で草だらけの登山路を登り始めた。ここを利用する登山者はほとんどいないんだな、そう思えるような路だった。山から落ちてきたらしい石がゴロゴロしていて、路は草やツタが伸び放題。それでも2~3分歩くと、やがて開けた場所についた。

膝丈くらいに伸びた雑草の生い茂る広場の突き当たりには、コンクリートで塞がれた古いトンネルがあった。ここが旧トンネルなんだな、そんなことを話しながらブラブラ広場を歩き回っていると、右手の奥に「登山入り口」という小さな看板がまた立っていて、山へ続くらしい獣路のような小路があった。その路の脇には、粗末な公衆トイレがある。トイレの入り口はかろうじて分かるものの、生い茂る草木に埋もれてトイレは半分以上隠れて見えない。

すると、友人の一人が急に(大)をもよおしてきて、トイレに行きたいと言い出した。このトイレを使えば？ 冗談半分に言うと、こんなトコでできるわけないだろう! 彼は少し怒って言い返した。仕方がないので、わたしたちは人里に戻ることにした。

登山路を降りて車に乗った時のことだ。わたしはジーンズのポケットに入れておいたケータイが無いのに気がついた。車内を調べたがどこにも見当たらない。さっき車を降りる前までは、確かにケータイはポケットに入っていたのに。

登山路のどこかにケータイを落としてきたらしい

わたしが言うと、

探してこいよ

友人たちはサラッと答えた。

トイレに行きたくてしょうがない友人は少しイライラしているようで、一緒に行ってくれとも言えず、わたしは一人でケータイを探しながら登山路を歩いた。ケータイは旧トンネル前の空き地入り口付近に落ちていた。ああ良かった、ホッとして車に戻ると、友人たちが少し青ざめてわたしの顔を見ていた。

大丈夫だったか？

そう言葉をかけられたので、ああケータイ見つかったよ、わたしが答えると、そうじゃなくて、誰かに会わなかったか？と、訊くのだ。別に誰にも会わなかったけど、そう答えると、友人たちは顔を見合わせてこう言った。

わたしがケータイを探しに登山路に入って行ったすぐあと、新トンネルから赤ん坊を抱いた女の人が出て来て、わたしを追うように登山路を登って行った、というのだ。

わたしは友人たちからかわれているのかと思った。霧雨が降るこんな夕暮れ時に、赤ん坊を抱いた女の人がこんな場所を散歩するはずがない。それに、登山路の両側は脇道もなく、草木が生い茂っていて、人が隠れられるような場所もない。わたしがケータイをみつけて戻ってくる間、もちろん、誰ともすれ違わなかった。

からかってんだろう、気味悪くなって友人たちを問いつめたが、彼等は真顔でわたしの顔を見つめ返した。それから、誰もいない草だらけの登山路に視線を移した。三人同時に鳥肌がたち、わたしたちは急いでエンジンをふかすと、逃げるようにその場を離れたのだ。

ATMの怖い話

その日、わたしは夜の8:30過ぎに自宅近くのATMに行った。次の日に友人と横浜までドライブに行く予定だったので、前日のうちに現金を引き出しておこうと思ったのだ。

当時、わたしが住んでいた場所は田舎だったので、PM9:00にはATMは閉まってしまう。わたしがATMに着いたのは9時ちょっと前だった。現金を引き出すために中に入ろうとしたわたしは、ドアのガラス越しに人影が見えたので手をとめた。どうやら、体つきの大きな男の人が先に利用しているようだ。ドアガラスには目隠しのスモークがはいていたのでハッキリと確認出来ないが、先客はATMの機械の前に立って作業している様子。中からはATM独特の機械的な女性の声で「お振込先番号を入力して下さい」と音声案内が聞こえてくる。わたしは先客が出てくるまでATMの前で待つことにした。

ドアの横に取り付けられたランプには、赤文字で「使用中」の表示が出ていた。それを眺めながら5分も待ったろうか。わたしの他にもう一人、中年の女性がATMを利用しようとやって来た。女性は「使用中」の表示とガラス越しの先客の人影を見てからわたしの後ろに並んだのだが、いくらも待たないうちに車に乗ってどこかに行ってしまった。他のATMを使った方が早いと思ったのだろう。

時計を見るとPM8:50分。早くしないとATMが閉まってしまう。先客の男性はぜんぜん出てくる気配がない。少しイライラしてドアをノックしたのだが、返事がない。そこで「すみません、まだ時間かかりそうですか？」と声をかけてみた。だが、やっぱり返答はなかった。失礼な奴だなと思いながらドアをそっと開けてみると、ATMの中には誰もいなかった。

あれっ・・・？

ドアの外の表示を確認すると「御利用できます」の文字が緑色に光っていた。機械の故障か、目の錯覚だったのか、とにかく早く現金を引き出さないと営業時間が終わってしまうので、わたしはカードを取り出し、革の財布をATMの上に置き、「お引き出し」のボタンを押そうとした。すると ピッ！ という音と共に「お振込」画面が出て来た。

はじめは操作を間違えたと思った。取り消しボタンを押してもう一度やりなおすと、やっぱり「お振込み」画面が出てくる。何度やっても「お振込み」画面が勝手に表示されるのだ。こんな時に限って故障か？ 少し焦ってそんな作業を繰り返していると、ATMの上に置いておいた革の財布が突然 バサッ と落ちた。わたしが触ったわけでもなく、落ちるはずのない場所に置いておいたので、どれほど驚いたことか。革の財布がひとりでに滑って落ちるはずはない。すると、今度はATMが正常に動作した。

財布を拾い、現金を引き出して、わたしはATMを出た。狐につままれた気分でATMを振り返ると、ドアの外の表示は「使用中」の赤文字になっていて、あろうことか、中にはさっきの男の人影があった。ギョッとなって目を凝らしてみたが、やっぱり中に誰かがいる。それから、中の男はゆっくりとこちらを方を振り向きはじめた。その時、ちょうど営業時間が終了したのだろう、ATMの電気が消え、ゆっくりとシャッターが降りはじめた。

あの不思議な出来事は何だったのか・・・・・・単なる機械の故障だったのだろうか、それとも、目の錯角だったのだろうか。以来、何度か同じATMを利用しているが、不思議な男の人影は見たことがない。

頼む女

何年か前、母親が緊急入院して手術を受けた。手術は成功したのだが、術後の経過が悪く、家族が交代で一日に何度も病院を往復しなければならなかった。わたしも、一日に一度は病院に通う事になり、これはその時に体験した気味の悪い話だ。

母の入院していたのは地方の総合病院で、建て替えたばかりとうこともあり、まだ新しく、採光のいい近代的な造りだった。

母の病室は4階にあり、わたしはいつも病院の中央にあるエレベーターを使っていた。他の人間と滅多に乗り合わせる事のないそのエレベーターに乗ると、壁には院内の見取り図が書いてある。暇を持て余すと、わたしはいつもその見取り図を眺めていた。

2階に売店、検査室、人工透析室、3階は婦人科、小児科の入院病棟・・・といった具合に、その病院のどこに何かあるのかすっかり覚えてしまったある日のこと。

母の病室に行こうと一階でエレベーターを待っていると、地下一階からエレベーターが昇ってきた。この病院の地下はスタッフや医師の研究室、図書館、それに霊安室があるので、地下からあがってくるエレベーターに乗っているのは医師か事務員の人と決まっていた、わたしはてっきりそういう人たちが乗っているとばかり思っていた。

予想に反し、エレベーターにひとりで立っていたのは、中年太りでメガネをかけた60代くらいの普通の女性だった。お見舞客にしか見えないその人は、わたしをまっすぐ見つめたままエレベーターに乗っている。不思議に思いながらもわたしはエレベーターに乗った。

エレベーターが4階に到着する直前のことだった、背後の女性が急に話しかけてきた。彼女はわたしに地下1階まで一緒に行って欲しいと頼むのだ。

知り合いが地下の霊安室で迷ってしまったらしく、探しに行きたいのですが不安なので一緒に来てもらえませんか？

そんなことを言う。

4階に着いてエレベーターのドアが開いたので、わたしはもちろん断わった。病院の関係者か看護婦さんにでも頼んで下さいと断ったのに、女性はどうしてもお願いします、としつこく頭を下げる。なんだか断わりずらくなって、わたしは一緒に地下へ降りて行く事になった。

地下に着くと、研究室や図書室のドアが整然と並んでいて、それらの部屋の奥に霊安室へ続く廊下があった。曲がり角の多いその廊下には、他にも倉庫や「立ち入り禁止」のプレートが掲げら

れたドアがいくつもあり、確かに迷子になりそうなほど入り組んでいた。

5つほど角を曲がると、霊安室のドアがズラッと並ぶ場所に突き当たった。その廊下には男の人が一人立っていて、わたしの顔をきょとんとした目つきで見ている。わたしはてっきり、その男性が迷子になった知り合いかと思い、お知り合いが見つかって良かったですね、そう言いながら後ろをついて来たはずの女性を振り向くと、中年太りの女性がどこにもいない。変だなと思いながら廊下を少し戻ってみたが、人っこひとり見当たらなかった。しかたなく霊安室の廊下まで行くと、さっきの男の人が話しかけてきた。

あなたが霊安室で迷子になった方ですか？

思いがけずそんなことを訊かれ、わたしはびっくりした。迷子になったのはそっちの方でしょうと言いたかったが、ここに来た事情を説明すると、その男性も同じようにメガネの女性から「霊安室で迷ってしまった知り合いを探して欲しいと頼まれた」と答えた。

薄気味悪くなって、その男性と一緒にエレベーターまで戻ったときだ、エレベーターがスッと降りてきて、ドアが開き、メガネの女性が別の人を連れて乗っている。

わたしたちがエレベーターに乗ると、彼女は連れと一緒にそこで降り、霊安室へ続く廊下の角に消えた。まるでわたしたちが見えていないように、メガネの女性はこちらには見向きもしなかった。

なんなんでしょうね、あの人は・・・

霊安室の廊下で会った男性がそんな風につぶやいたが、それ以上言葉は続かなかった。わたしたちが遭遇した出来事があまりにも不気味で、深く考えるのが怖かったからだ。

真夜中のホテル

山梨県の下部温泉郷というところへ友人達と旅行に行った時の話し。

わたしたちが宿泊したホテルは下部温泉でも一番大きなホテルで、某有名人もかつて長期滞在したことが自慢の観光ホテル。

旅行に行く前、友人の一人がわたしにこう言った。

そのホテルはアレが出るってよ

アレ・・・幽霊とか、そういった類いのものだろう。オカルト雑誌にそのホテルが紹介されていて、どうやら一番古い女風呂に出るらしい。

ホテルに着いて部屋に荷物を置き、みんなで温泉を楽しんで、夕飯を食べながらビールを飲んで、騒いで・・・旅行を満喫した一日が終わり、その晩、わたしたちが眠りについたのは午前1:00ぐらい。昼間の疲れと、酔いがまわったせい、みんな布団に横になるなりイビキをかきはじめた。わたしも10分ぐらいで眠ってしまったと思う。でも、すぐに目が覚めた。誰かがわたしの右足首を触っているのだ。

最初は友人が寝ぼけて触っているのかと思い、気にせず横になっていた。けれど、足首を触られる感触はどんどん強くなり、気になって眠れない。何だか腹がたってきて飛び起きると、友人二人は自分たちの布団にちゃんと寝ていた。

おかしいな・・・？

そんなことを思いながらとにかく早く眠りたかったわたしは、また横になった。15分くらいすると誰かが右足首を触る。起きてみても誰もいない。そんなことを繰り返しているうちに2時間も過ぎた頃だ。

夏だったので、窓の外は明るくなりはじめていた。寝不足は嫌だったので、わたしは何がなんでも眠りたくて、頭から布団をかぶり、足首を触る手の感触も忘れよう、忘れようとした。すると、足首を触る感触が不意になくなった。良かった、これでやっと眠れる!!・・・そう思ったときだ。今まで足首を触っていた何者かの気配が、わたしの顔の方に移動した。頭から布団をかぶっているのに、何がいるのかは見えないのに、わたしの目の前に、誰かが顔を近づけて覗きこんでいるのがわかった。その何者かの息遣いまでハッキリ聞こえてくる。

怖いという感覚はなかったものの、脂汗が背中をぐっしょり濡らしていた。そのまま、わたし

と「何者」かは40分ぐらい掛け布団越しに睨み合っていたらどうか、布団の中にケータイを持ち込んでいたので、時間経過まで覚えている。怖くはなかったが、このまま眠ったらヤバイ気がした。でも、布団をはねのける勇気がない。

午前5:00になった時だ、わたしのケータイのアラームがピピピピッ! ピピピピッ! と鳴り出した。旅行に出かける朝、寝坊してはマズイとセットしたままになっていたのだ。その瞬間、掛け布団越しでわたしの顔をずっと覗き込んでいた何者かの声が耳元で聞こえた。

．．．．．大丈夫ですよ

その声を最後に何者かの気配は消えた。布団をどけてみても誰もいない。憎らしいことに、友人たちはグーグー寝ていた。

チェックアウトをする時、ホテルの気さくな従業員の一人に夕べの出来事を話すと、冷静な声でこんなことを言われた。

それはきっと、看護婦さんの幽霊ですよ。戦時中、このホテルは一時期、日本軍の病院として使われていたことがあるそうですから

そして、ホテルの従業員の中にも、白衣を着た不思議な看護婦さんの姿を見た者が幾人もいることを教えてくれた。

呪う女

ありえないような、本当の話をしようか。

神社で働いていた時のことだ。わたしが勤めていた神社はとても広くて、境内を一周歩くだけでも30～40分かかる。

夕方になって仕事の片づけや戸締まりをして歩いていた時のこと。樹齢何百年という大木が立ち並ぶ境内の片隅に、何か動くものが見えた。よく目を凝らしてみると、それは人間のようだった。境内は薄暗く、こんな時間にここを訪れる人はあまりいないので、その人のことが気にかかった。

わたしは気付かないフリをしながら、通り過ぎざまにチラッと視線を走らせた。すると、その人もわたしの方をジッと見ていて、バチッと目が合った。

相手は女の人。薄暗かったので年齢や人相はハッキリしないが、確かに女の人が大木の後ろから顔半分だけを出してこちらを見ており、彼女はわたしと目が合うと、逃げるように走り去ってしまった。

彼女がそこで何をしていたのか興味があった。普通の参拝客はそんな場所に入ったりしないし、こんな夕暮れに女性が一人でいるような所ではなかったからだ。

わたしは彼女が立っていた大木の裏側に回ってみた。するとそこには、非常に気味の悪い物があった。

大木の根元に、首の無い日本人形が一体転がっていた。

人形の胸には五寸クギが深々と刺さっている。

・・・呪い？

その言葉が頭に浮かんだ。嫌なものを見たなあ・・・だが、神社で働いている立場上、そのまま人形をほっておく訳にもいかず、回収し、焼却炉に放り込んだ。

社務所に戻って今あった出来事を同僚に話すと、呪われるぞ、と変な顔で脅かされた。呪をかけている所を第三者に目撃されると、呪いが成就しないのだそうだ。わたしは笑ってすませた。呪いなんてバカバカしい、心底そう思っていたからだ。

それから別段、かわったことは起こらなかった。わたしが何かにつまずいたり、物を落としたりすると、同僚達は「呪いだ!」と言ってからかったものだが、そんなのはありがちな些細な出来事。わたしは至って健康で、事故に遭うこともなく、家族に不幸が降り掛かるなんてこともなかった。

一ヶ月も過ぎると、わたしも周囲も、すっかりあの気味の悪い出来事を忘れてしまっていた。そんなある日、わたしは休日に散髪へ出かけた。自宅近所の馴染みの床屋は、わたしの同級生が奥さんと二人でやっている小さな店だ。

髪を切ってもらいながら、同級生と下らない世間話をしていた時だ、いきなり店のドアが開いて、女の人が飛び込んできた。

彼女は順番を待つでもなく、ものすごい勢いで散髪してもらっているわたしの所までやってくると、床に散らばったわたしの髪の毛をワシ掴みに拾って、そのまま店を飛び出して行った。その行動は、ほんの3秒かそこらだったと思う。わたしも、同級生も、その奥さんも、何が起こったのか理解できずに、しばらく女の人が走り去ったドアを見つめていた。

最近変な奴が多いからなあ・・・同級生がそんなことを言った。わたしが神社で出会った無気味な女と、首無しの日本人形のを思い出したことは言うまでもない。誰かに呪いをかける時、相手の毛髪を使うとかいう話を聞いていたからだ。

もしかしたらあの女に呪われているかもしれない、自分が不運だったりすると、たまにそんなことを考える。

ノックする男

もう、10年以上前の話だ。

その頃、わたしは芝居にハマっていて、友人と二人でよく東京へ出かけていた。面白そうな芝居を3つ〜4つピックアップしておいて、ホテルに一泊しながら観劇三昧の贅沢な二日間。いつも利用するのは新宿のワシントンホテルで、ツインで部屋をとり、夜中過ぎまで友人とその日観た芝居の感想を語り合うのが楽しみだった。

ある年の冬、久しぶりに面白そうな芝居があるから観に行こう、友人からそんな電話があった。午後7時から開演の芝居が終わったのは11時近くのこと。わたしがいつも通りワシントンホテルに泊まるつもりで駅の方へ歩いて行こうとすると、友人はタクシーを拾い、今日はワシントンじゃないよ、と言う。

大学のセンター試験のせいでこのホテルも一杯で、御苑にあるホテルが一軒だけ空いてたからそこをを予約してある、とのことだった。

そのホテルは、大通りに面した一階は焼肉レストランになっていて、薄暗い路地に面した場所にフロントがあった。6畳ほどの狭いフロントでチェックインすると、部屋のカギを二つ手渡された。ツインが満室で、シングルを2部屋予約したのだそう。

友人とエレベーターに乗って予約した部屋の階へ着くと、彼はわたしの手から鍵をひとつぬき取って、さっさと自分の泊まる部屋を決めてしまい、わたしに残されたのは突き当たりの角部屋。友人と廊下で別れ、部屋のドアを開けたとたん、そこは何とも言えない嫌な感じがした。部屋はこざっぱりとしていて、雰囲気はとてもいいのだが、ワケもなく落ち着かない気分になる。明日も芝居を観る予定があったので、とくかくシャワーでも浴びて早く眠ろう、そう考えたわたしは服を脱いで浴室へ入った。

シャンプーして、体を洗って、歯を磨いて・・・シャワーを出しっぱなしでそんなことをしていると、誰かが部屋のドアをノックしている。友人だと思ったわたしはシャワーを止め、

今、シャワーを浴びてるからあとで行くよ!

浴室のドアを開けて大声でそう答えた。

ところが、服を着て大急ぎで友人の部屋まで行くと、彼は眠そうな目をこすりながら不機嫌な顔つきでドアから顔を出しました。もうとっくに熟睡していた様子。どうかした？ そう彼が言うので、さっきドアをノックしたろう、と答えるわたしを、友人はきっぱり否定した。

そんなはずはない、自分はずっと眠っていた。なにかの聞き間違いだろう

へんな気分だった。聞き間違いじゃなく、誰かがノックする音をハッキリ聞いたのだ。けれど友人はさっさとドアを閉めて眠ってしまった。その頃になって、わたしはあの部屋に入った時の嫌な感じが思い出されて怖くなってきたのだが、友人の寝起きの悪さも怖かったので、部屋を交換してくれとも言えず、しぶしぶ自分の部屋のベットに潜りこんだ。ところが今度は寒くて眠れない。冬だったので部屋にはもちろん暖房が入っていた。わたしは暖房の設定温度を32℃まで上げ、すっぽり布団にくるまって眠ろうとしたが、全身ゾクゾクしてとても眠れない。

そんなことをしている内に真夜中を過ぎで、時計は午前3:00を指していた。相変わらず寒くて眠れないし、何だか心細くなってきたわたしは、今日観る予定の芝居のチケットを取り出して、なんとか楽しいことを考えようとしたとき・・・誰かがこの部屋をノックした。

コンコン、コンコン・・・。

ノックの音は2回でやんだ。来るべき者が来た、理由もなくそんな気持ちになったわたしは、ベットから出てドアを開けた。ドアの外には誰もいない。だが、本能がなにかを警告していた。とても危険で禍々しいものが近くにいる予感。見たくない・・・だが、見なくてはならない、わたしは決意して廊下全体に目をやった。この部屋からまっすぐ伸びた廊下の突き当たりに、スーツ姿の男性がこちらを向いて立っている。最初はホテルの従業員かと思ったが、すぐに違いと確信した。スーツ姿の男性は手足を動かすこともせず、わたしの方へジリジリ近付いてくるのだ。古典的な幽霊がフワフワ浮いているのとは違って、廊下を滑るように近づいてきて・・・そのスピードはどんどん早くなり、まるで突進するような勢いですぐそこまで迫ってきた。わたしはヤバイものを感じて咄嗟にドアを閉め、その拍子にベットの上に置いてあったチケットが床へ落ちた。ドアの向こうはシンと静まり返って、ノックする音も聞こえない。ちょっと安心して、わたしはベットの下に落ちたチケットを拾おうと床に屈み込みこんだ。

その時。

わたしはベットに隠れたこの部屋の壁を見て硬直した。まるで血しぶきのような茶色いシミがベットの下に隠されていたのだ。慌ててフロントに電話すると、それはコーヒーのシミであり、あいにく今夜は満室で、他の部屋を用意することも出来ません、とあっさり返答された。どう考えても、コーヒーをこぼしたようなシミには見えないのだが・・・。いずれにせよ、その晩はそこに泊まるしかなかった。

結局、わたしは一睡もできずそこで朝をむかえ、おまけに原因不明の高熱が5日も続いて、次の日の芝居を観ることもできず寝込んだのだ。

あの部屋は何だったのだろうか？

もう二度と泊まりたくない。

怖い話はすぐ隣りブログ↓

<http://kawai-hanashi.cocolog-nifty.com/>

超怖い話はすぐ隣り(有料版)↓

<http://p.booklog.jp/book/24822>

著者：あづま にしき

肝試し 百物語 お化け大会 怖〜い読み聞かせに最適

怖い話に最適な怖いBGMダウンロード↓

http://www.dlmarket.jp/default.php/manufacturers_id/3218

怖い話に最適な怖い効果音CD販売↓

<http://soundnext.jimdo.com/>

『超怖い効果音/日本の怪談編』 CD-R

『戦慄の効果音/現代怪奇編』 CD-R